東京. 194 pp. ISBN 4-7891-2053-8. ¥3,296（税込）. 生物群集の分類や座標づけ，ニッチ分析などの手法を解説. (MS)

Community Ecology.—R. J. Putman. 1994. Chapman & Hall, London, UK. xii＋178 pp. ISBN 0-412-54490-3 (cloth), 0-412-54500-4 (paper). 群集生態学に関する最新のテキスト. (MS)

□ **魚類学一般**

Australian Native Fishes for Aquarium.—R. Leggett and J. R. Merrick. 1987. J. R. Merrick Publications, NSW, Australia. 241 pp. ISBN 0-9591908-1-3. 約¥2,600 (A$ 38.00). オーストラリアのアクアリストのために書かれた本. タンクの設置から採集，給餌，繁殖の方法，病気の対処，写真の撮り方などの説明に続いて，73 種の淡水魚と汽水魚を紹介している. 各魚種については，カラー写真とともに名称，分布域の他，とくに飼育に関する特徴を説明している. (HK)

□ **その他**

東京湾の地形・地質と水. —貝塚爽平（編）. 1993. 築地書館株式会社，東京. 211 pp. ISBN 4-8067-2192-1. ¥2,987（税込）. 東京湾の生い立ち，東京湾湾底と周辺地域の第三紀層および第四紀層，東京湾と周辺の沖積層，東京湾に入る水，東京湾の水と流れ，湾底の最新堆積物の計 6 章からなる. 東京湾をフィールドにする研究者にとって便利な一冊. (MM)

新さかな大図鑑. —小西英人（編）. 1995. 週刊釣りサンデー，大阪. 559 pp. ISBN4-87958-022-8 C3645. ¥6,700. 釣り人を対象とした本であるが，各種の鰭条数，形態的特徴，生息場所，分布などが簡潔に書かれている. 魚を釣り上げた直後に撮影した写真を使用しているので，色彩の情報として貴重である. 著者は荒賀忠一，望月賢二，中坊徹次，小西和人，今井浩次，御勢久右衛門. (KM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
42(2): 214-217, 1995

大阪市立自然史博物館の紹介
Osaka Museum of Natural History

大阪市立自然史博物館は大阪市を南北に横たわる上町台地の南のはずれに位置する東住吉区内にある. ここには大阪市の南部の人々の憩いの場となっている長居公園があるが，博物館はこの公園の植物園内に建てられている. 公園内にあることもあって，周りは非常に静かで町なかの施設としては恵まれた環境にある. 当館は大阪市の教育委員会に属する博物館施設であるが，大阪市には当館以外にも理工系の市立科学館（旧電気科学館），民族・歴史系の市立博物館，市立美術館がある. 当館の敷地面積は 6744 m^2. 建物は地下 1 階，地上 3 階建てで延べ床面積は 7066 m^2 ほどある. 毎年の維持，運営のための費用は約 1 億 3 千万円（1993 年度決算）ぐらいである. 常設展示は［人と自然］をメインテーマとしたストーリー展示である. そしてこのテーマが［大阪の自然］，「地球と生命の歴史」，「生物の進化」，「自然のめぐみ」というサブテーマをもつ 4 つの展示室によって展開されている. 最新の目を引くようなハイテク展示はないが，随所に学芸員の思い入れがあって，何度来ても飽きない展示になっている. このことはここ数年コンスタントに記録されている 20 万人前後の入館者数が物語っているように思う. しかし，この展示も更新後約 10 年が経過しており，最近の学説にあわない部分も多くでてきたり，また，展示物の劣化，コーナーによっては新しい展示手法による効果的展示の可能のある箇所などもでてき，現在，新たな展示更新が計画され，実行に移されつつある. 展示にはこの他に，地元大阪とその周辺地域の自然誌を紹介したり，学芸員の研究成果を広く市民に還元すると

いう趣旨の特別展示（夏〜秋）や，市民からの寄贈品や館の収集物を紹介する新収資料展（春），小規模な特別展示である特別陳列などがある．

当館は1950年11月に，自然科学博物館という名称で，市立美術館（天王寺区）の2階の廊下を間借りして開館した．当初のスタッフは事務職員を除いて館長1名（筒井嘉隆氏），常勤嘱託の職員1名のたった2名であった．その後，1958年に市内西区の靱公園に移ったが，この時の建物も新しいものではなく，大阪市立大学文学部が使用していた旧靱小学校校舎の一部であった（この時の学芸員は館長を含め6名）．現在の長居公園に本当の意味での新館が建設され，名称も現在のように自然史博物館となったのは16年後の1974年である．現在の学芸スタッフは13名で，分野は，動物（3名），昆虫（3名），植物（2名），地史（3名），第四紀（2名）の5つである．事務職員他を合わせると職員総数は30名近くになる．この4月からは学芸出身の宮武頼夫氏が館長職に就任している．学芸員は研究職であり，館は科研費取扱規定の学術研究機関に指定されている．

建物がなかった当館は当初，活動の場を自然の中に求め，市民とともに野山を歩きながら，活動を行っていた．普及教育は現在の館の活動の大きな柱となっているが，原点は自然に入って自然を学ぶという精神のもとに行われていたこの器の無い博物館時代の活動にある．現在の普及教育活動の中でこの精神が最もよく現れているのは野外観察会である．やさしい自然かんさつ会，地域自然誌シリーズ，テーマ別自然観察会というタイトルのもと，これらの観察会は年間15回前後行われている．環境教育が叫ばれる中，いずれの観察会にも参加者が多く，13人の学芸員が総動員体制で行事をこなしている．もちろん，専門性の関係から現在のスタッフではまかないきれるものはなく，外部講師を依頼したり，また，保安などの立場から，専門外の学芸員が応援に駆けつけることは普通である．また，植物園内にあるという条件を生かし，植物担当の学芸員が毎月1回の植物園案内を行っているが，この行事は1974年の新館オープン以来20年間欠かしたことがない．この他，室内実習，自然史講座（学芸員がそれぞれの研究内容を市民にわかりやすく解説する月1回の行事），科学映画会などをあわせると，普及行事は年間50〜60回ほどになる．また，普及教育は研究者としての学芸員自らが市民の中に入って行うべきだという立場から，展示室の一角に普及センターというコーナーを設け，学芸員が毎日交代で待機し，入館者の質問などを受けている．

当館は，「友の会」育成も普及教育の大きな柱と考えている．育成された友の会とはいっても館主導型のものではない．友の会の運営は会員の中から選ばれた10数名の評議員と学芸員でもたれる年6回程度の定例の評議員会で討議されたものをもとに行われている．評議員はいずれの方も熱心で，定例会以外にも何度も博物館に足を運んでいただき，博物館を積極的に利用しようとする友の会会員の期待に応えるべく活動していただいている．いわば，学芸員・会員が一体となって運営される友の会である．評議員には交通費などの経費は支払われるが，ほとんどは手弁当の状態である．これは友の会が，2名のスタッフでしかも間借り施設時代に博物館活動を支えてくれた一般の人々が設立した「自然科学博物館後援会」(1955) や，それを改称した自然探求的指向の強い同好会的組織時代の「大阪自然科学研究会」(1958) が母体となっていることと強く関連していることにほかならない．ここ数年会員数は約1800名前後で，博物館の行事とは別に年間20近い行事をおこなっている．もちろんこれらの行事には学芸員も参加する．この他に毎月普及誌としてNature Study誌を発行している．この刷り上がり12ページの小冊子は学芸員が編集するが，後援会設立当初から出版され，来年（1996年）1月号で通巻500号を迎える．会費は年間3000円である．この会費のほとんどが印刷代に回されているのであるが会費としては時勢がら格安のものであろう．多くの会員から行事ごとに満足の声を聞き，自然に親しむ人々が増えていることを実感するが，いかに評議員の無償の奉仕が多きいものか想像できるだろう．

館の直接の普及活動ではないが，当館に事務局を置くサークルといったものも多くある．筆者の所属する動物研究室には「大阪湾海岸生物研究会」というサークルの事務局がある．この研究会は，海の生物に興味のある主婦からプロの研究者にいたるまでいろいろな層の人々約80名あまりで構成されている．そして，大阪湾に残っている海岸の自然を将来にわたって残して行こうと，定期的に調査を行ったり，勉強会を行い研究成果を発表している．

研究用施設は収蔵庫も含んで約1800 m^2である．廊下を隔てて各研究室と標本制作室が向かい合ってならんでいる．研究室は約50 m^2あって3人のスペースとしては割とゆとりがある（少なくとも筆者の属する動物研では）．また，研究機器は電子顕微鏡をはじめとして，軟X線写真撮影装置など一応のものは揃っており，欲を言わなければ不自由はない．ただ，収蔵庫だけは別である．200〜300 m^2ほどの面積を持つ収蔵庫が4つあるが，筆者が3年前に就職した時には，植物・昆虫・両生爬虫類

などの標本ですでに満杯の状態であった．

研究用図書は年間約130万円の予算による購入や交換（国内約300カ所，国外約500カ所）によって集められている．大学，博物館施設，水研，水試等の研究報告書，学会誌等で魚類に関するものは1950年以降のものに関してはほとんど揃っており非常に助かっている．また，寄贈によるものも多く，その中に明治末から大正にかけての動物学雑誌などがあるのはありがたい．蔵書数は，受け入れ登録されたもので単行本約8000，雑誌類約95,000であるが，未登録の寄贈のものもあるので実際はこれよりかなり多いものと思われる．2次資料としての図書の受け入れ，整理に関しては司書がほしいところであるが，週4回ほどのアルバイトでなんとかこなしている．

出版物としては研究業績発表の研究報告（1954年より発行され1994年度現在で49号）や自然史研究（1968年より発行された随時の出版物で1993年度現在で1巻［17号］，2巻［現在10号まで］が出されている），収蔵資料目録（収蔵資料の豊富な植物，昆虫に関するものが多く，現在第26集まで発行），大阪周辺のある生物群を解説したミニガイドなどがある．これらの出版物が図書交換用として使われている．ただ，友の会の発行する普及誌 Nature Study は文献的価値のある記事も多いのだが友の会が博物館とは別個に運営されているため館の交換物にはなっていない．

筆者の属する動物研究室には現在3名学芸員がおり，それぞれ，海産無脊椎動物，哺乳類・鳥類，両生・爬虫類・魚類（筆者）を担当している．一昨年までは筆者が哺乳類・鳥類も担当していた．しかし，魚類が専門の筆者にとってこれらの分類群については標本管理ぐらいしかできず，多くの市民が博物館に期待している野鳥観察などの行事ができず苦慮していたところであった．幸いなことに，昨年なんとか1名鳥類専門の学芸員を得ることができ肩の荷をおろすことができた．両生・爬虫類については前任の柴田保彦氏が嘱託の館長職を今春退かれてからは全面的に筆者が担当することになった．模式標本が数多く含まれる当館のこれらの分類群については，質量とも日本では有数のものである．もちろん筆者は専門外で積極的な資料収集，専門的な同定などのサービスはできない．しかし，将来の学芸員の増員を期待し，標本の貸し出しも含めた維持管理を行っている．

魚類の液浸標本は大きいものを除き基本的に70％エチルアルコールで保存している．ただ，魚類専門の学芸員は筆者が初めてであったこともあり，大きさ，形のさまざまな魚類に関しては収蔵するスペースや標本の準備のためのスペースはほとんどない．現在，展示更新のための展示室の拡張にともない，収蔵庫の拡張なども計画されているが，こられの施設に期待をよせている．将来的には，分類群ごとに整理するつもりであるが，現在はさしあたっての貸し出しなどの利用の便を考え，暫定的に地域ごとに“まとめ”ている．現在，大阪市立自然史博物館魚類資料 (OMNH-P) として登録されている標本は約7000点ほどあるが，まとまっているもので主なものをあげる．

トカラ列島産魚類：当館が自然科学博物館時代（1953年）に行なった学術調査における採集標本．約400点．蒲原稔治博士がその調査に加わって魚類を担当した．その結果は Kamohara (1954) および蒲原 (1955) で報告されている．標本には番号がふされておりデータもすべてあるのであるが，前者の報告には標本番号が記述されていないため，大きさなどをもとに記載された標本を現在照合中である．なお，OMNH-P のスタートはこのコレクションから始まったが，OMNH-P 1 は偶然にも筆者が専門とするウツボ科のゼブラウツボであった．

ルーマニア産淡水魚類：バナレスク博士収集，同定のもの，190点．

兵庫県産魚類：本会会員鈴木寿之氏寄贈のもので淡水魚も含む約2000点．寄贈受け入れは現在も継続中．

琵琶湖・淀川水系淡水魚類：琵琶湖・淀川に関する特別展が過去3回 (1965, 1991, 1994) 行われたがそれに関連して採集された淡水魚類の標本で整理され登録されているもの約700点．

自然系地方博物館の任務のひとつとして，その地域周辺で見られるいろいろな生物を収集して生物相を明らかにし，それを将来に役立てるために保管するということがある．この意味で瀬戸内海の東の端，大阪湾を目の前にする当館がこの責務をはたすのは当然のことであろう．大阪湾の魚類については漁業資源としての研究は水産試験場などで比較的なされ，報告もされてはいるが，標本に基づく正確な目録づくりはまったくなされていないのが現状である．筆者は現在，当館の資料収集業務のひとつとして，近い将来の常設展示の更新にも活動の成果が生かせるよう，その更新時期をめどに大阪湾およびその周辺海域の魚類標本の採集，目録づくりを行っている．

引用文献

蒲原稔治．1955．トカラの魚．高知大，学術研報，4(8): 1–11.
Kamohara, T. 1954. A list of fishes from the Tokara Islands, Kagoshima Prefecture, Japan. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 3: 265–299.

(波戸岡清峰 Kiyotaka Hatooka: 〒546 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館)

魚類学雑誌
42(2): 217-219, 1995

追悼羽根田弥太博士
Dr. Yata Haneda (1907-1995)

日本魚類学会名誉会員，横須賀市博物館前館長，さらには世界的に著名な発光生物学者であられた羽根田弥太博士は膀胱癌で入院加療中のところ 1995 年 1 月 30 日未明逝去された．享年 88 才．

先生は明治 40 年 (1907) 1 月 2 日岐阜県大垣（現在大垣市平町）に医者でしかも村長の長男として生まれた．1931 年に旧制高知高等学校を卒業，台北帝国大農学部に入学したが，故あって 1 年で退学し 1932 年に東京慈恵医科大に入学した．1936 年に慈恵医科大を卒業すると同時に衛生学教室の助手となった．1937 年には医籍に登録され，1940 年に講師に昇任．1942 年 1 月医学博士取得（主論文：発光細菌および細菌と動物の共生）．1942 年 12 月結婚（道代夫人，医師，現在も逗子で開業医として活躍中），その後に慈恵医科大を辞し，陸軍司政官として昭南島（現シンガポール）の昭南博物館（現在の Raffles Museum）副館長となる．戦後 1946 年に復員し，翌年に横須賀市教育部（技師，指導主事）に職を得た．1955 年

Fig. 1. Yata Haneda at Tokyo Jikeikai Medical College (ca. 1937).

9 月に横須賀市博物館（現横須賀市自然博物館）館長となり，1974 年 3 月の退職時まで館長を勤めた．退職後も博物館の嘱託，研究員として入院直前まで発光生物の研究に取り組んだ．

先生は冬の大垣の寒々とした空が嫌いで，高知は温かくて気風もおおらかでいいとよく言われた．おそらく温かさのために台北帝大を選んだが，結局父親の志をくんで慈恵医大に入学したものと思われる．3 年生で衛生学教室に入り，矢崎教授の手伝いをする中で発光細菌の幻想的な美しさに魅了されてしまう．4 年生 (1935) で処女論文「Macrouridae 科深海魚の発光現象に就きて」を矢崎教授と共同で発表する．つまり，先生は Bacteriology を武器に深海魚の発光器の研究でその後約 60 年にわたる輝かしい研究生活をスタートさせた．深海魚を研究対象にしたのはごく自然で，先生はあの旧制高校時代に楽しんだ高知の御畳瀬をフィールドとし魚種名の同定を高知高校の恩師蒲原稔治教授にお願いしたからである．生きたチゴダラが浅虫臨海実験所（東北帝大）にいると聞き，浅虫でチゴダラの発光現象の観察を行ない（1936 年 8 月），所長の畑井新喜司教授の知遇を得る．矢崎教授との出会いとともに畑井教授との出会いも先生にとって決定的に重要なものであった．つまり，当時畑井教授は日本学術振興会パラオ熱帯生物研究所の所長であり，畑井教授の推薦で羽根田先生は慈恵医大に在籍のまま 1937-42 年までパラオ熱帯生物研究所の研究員に任命された．先生は南洋群島に 4 回出張し，帰途には，いつでもフィリピン，マレーシア，ボルネオ等でサンプリングをくりかえし，まさに発光キノコ，発光バクテリアから発光ムカデ，発光エビ，発光イカ，発光魚類までその分布と生息場所，採集方法までを知悉する発光生物学者として実力を確固たるものにした．1942 年の夏，4 度目のパラオ滞在時に羽根田先生は昭南博物館に赴任するよう文部省からの電報を受け，その年の 12 月には昭南博物館に到着した．先生が発光生物研究と博物館研究（新しい博物館の在り方を探る研究）の二足の草鞋で歩み初めたのは将に 36 才にならんとする時だった．尚，先生は博物館赴任直前に結婚した．道代夫人は現在も逗子で評判の高い開業医として活躍中であるが，また発光生物研究の最も良き理解者でもあった．

戦後，1954 年に先生は，当時発光生物の第 1 人者プリンストン大 Newton Harvey 教授から生物発光国際会議の招待状を受け「日本および極東の発光生物について」の発表を受諾した．会議は気鋭の研究者 30 名が，Asilomar のホテルに 4 日間缶詰になり一人 1 時間発表 30 分の討論であった。この会議により先生は，世界の研究者

Fig. 2. Dr. Yata Haneda at Palao Tropical Biological Station (ca. 1942).

と連絡が取れるようになったばかりか，日本での発光生物研究の位置づけが「趣味的，好事的」であるのに対して，「アメリカでは生物学者，生化学者が共同で，大きな研究費を背景に生涯の仕事として，生物発光の研究は生産を伴わなくとも，未知の事実を科学的に解明することに意義があると言っていたことに感銘」する（発光生物の序文より，1985年）．47才の春だった．

羽根田先生の人生はとてもドラマチックでここではとても簡単には書き尽せない．事実，先生ご自身も「無計画で無茶苦茶に生き抜いた私の人生」というエッセイを岩山会会報（パラオ熱帯研関係者の会報）13号(1981)に載せている．昭南博物館での活躍については中公新書(No. 659)「思い出の昭南博物館」(E. J. H. コーナー著，石井訳）を参照されたい．また，先生ご自身による自伝

Fig. 3. Dr. Yata Haneda, as a Director of Yokosuka City Museum (ca. 1967).

的エッセイ「発光生物との出会い」フィッシュマガジン1976年7月号68–74と「光とともに」日本の生物，1 (10): 5–8 (1987) も是非一読されたい．

小生が羽根田先生をお訪ねしたのは1976年で当時発表した *Argyropelecus* の眼の論文について意見を求めたのが最初である．初対面にもかかわらず，先生は終始ニコニコと長時間お付き合いくださった．そのとき以来，魚類学会の折にはいつもお会いして博物館で1泊させていただくのが決まりのコースとなった．アオメエソに発光器を見つけたのも，*Malacosteus* の眼の研究へと進んだのも羽根田先生の激励によるものと感謝している．1980年には，先生，奥様と御一緒に San Diego での国際発光シンポジウムに参加した．先生は特別講演の際，満員の会場（UCSD のホール）の壇上でメガネを探して約5分ほど講演を中断され，奥様と二人で溜息をつきながらヤキモキしたのはつい昨日のような気がする．先生の発表内容は，発光性カタツムリについてでスライドも美しく，堂々としたもので大変評判がよかった．会議の終了後，メキシコへ出掛けたのも楽しい思い出である．小生がプリマスへ1年間留学した際，羽根田先生が奥様と突然訪ねてこられ，約5日間ほど楽しい日々を過ごしたのも1984年の夏の思い出である．書きたいことはまだ山ほどあるが，最後に，小生なりの先生の特徴を述べてこの追悼文を終わりたい．

1) 先生は，人のものマネが大嫌いで，とにかく新しい発光生物を追い求めた．事実たくさんの新しい発光生物を発見した．探求心は入院中も衰えず，「早くヒカリエビの件をかたづけなければ」と言われていた．また，先生は日本でよりも欧米で有名であった．おそらく，新しい事実の発見（独創性）にたいする評価の違いの反映と思われる．

2) 先生は，若いころからパラオ研究所や昭南博物館での経験を積んだためか独創的な研究者にありがちな「人間嫌い」ではなかった．そのため，海外の友人，しかも付き合いの長い友人が多かった．明治生まれにもかかわらず，国際的なセンスを持った研究者で，国際的な共同研究の論文も多い．

3) 筆まめで，考え付いたことの多くを素早く論文にできる人であった．総論文数約200．主な編著書3冊，1) Bioluminescence in Progress (Eds by F. H. Johnson and Y. Haneda), Princeton Univ. Press (1966)．2) 発光生物の話 北隆館 (1972)，3) 発光生物　恒星社厚生閣 (1985)．

4) 先生は畑井教授と矢崎教授の影響かもしれないが権威主義が嫌いだった．発光生物の研究以外はやりたくないという良い意味での強い個人主義の現われではない

かと小生は考えている．

5) 先生は，行動の人で旅行が大好きであった．思い立ったらすぐ，と言う主義で，シンガポール，台湾，マレーシア等へよくサンプリングに出かけた．

6) 語学が好きで，マレー語が話せたし，ラジオ会話でよくスペイン語を勉強していた．

7) 常に快活，楽天的で，冗談や Funny な話が大好きで，先生と一日中発光生物にまつわる話をしても飽きることがなかった．この点で，先生は多くの人から敬愛されていた．

8) 先生は，新しものがりやで，新しくて良いカメラがでるとすぐに買い換えていた．論文等の写真は皆自分で撮られたものである．また，研究面でもいち早く発光スペクトル等の新しい分析的手段を利用していた．

9) 先生はスランプとは無縁であった．先生の研究対象は大変広く（バクテリア，キノコ，ホタル，ムカデ，カタツムリ等），発光魚の研究がうまく行かなくても「ちょいと八丈島に行って来ます」とでかけ，光るキノコ等を集めることでストレスを解消していた．

10) 個人的な結論．上記の特徴をもつ羽根田先生が発光生物を生涯のテーマとして選んだのでは決してない．逆に，発光生物が先生を「発光生物研究の適格者」として選んだというのが正解なのではないかと小生はマジメに考えている．そして，先生は発光生物の期待に生涯を賭けて応えた．

最後に，約20年にわたって公私に御教示下さり有難うございました．特に研究者としてどう生きるかを身をもって示して下さり，お礼の言葉もありません．先生とあの楽しい会話をもう持てないのは残念です．しかし，先生からのバトンは必ず誰かにお渡ししたいと考えていますので御安心ください．

（宗宮弘明　Hiroaki Somiya：〒229 相模原市渕野辺 1-17-71　麻布大学獣医学部動物工学研究室）

魚類学雑誌
42(2): 219-221, 1995

羽根田弥太博士逝去

横須賀市博物館の館長 (1955-1974) を努められた羽根田弥太先生（医学博士）が 1995（平成7）年1月30日に88歳で永眠された．先生は日本魚類学会の名誉会員 (1984-1995) として昨年春の年会にも元気に出席されていた．ここに謹んで哀悼の意を表するとともに，日本の博物館と魚類学の発展のために多大のご尽力をされたことに心より感謝したい．羽根田先生の略歴と発光生物研究の業績については，先生が亡くなられる直前まで公私ともに良き話し相手でおられた宗宮弘明博士の追悼文（本誌同号）に詳述されているので，ここでは博物館界に残された数々の業績を主に紹介したい．

親友の故川本信之博士（右側）と一緒に．

先生は終戦後の1946年に広島県大竹に復員し，その年に晩年までお住まいになる三浦半島の地に移られた．縁あって横須賀市に職が決まり，医学博士であったことから市教育部（現在の教育委員会）の学校衛生技師としての採用であった．公務員としてスタートをきられた先生だが，実は「公務員としての生活は大の苦手だ」と度あるごとに話しておられた．しかし，それだけに地方行政との関わりを大変良く研究し，理解することにも決して努力を惜しまれなかった．その後6年間は市保健所検査課に勤務のかたわら，市資料館（後に博物館となる）の整備計画にも参画され，この計画は市博物館設立構想に進展して1954年にペリー上陸の地である横須賀市久里浜に開館する．博物館のあり方と基本的な構想の原点には，先生が陸軍司政官としてシンガポール（昭南島）に赴き，現ラッフルス博物館（当時の昭南博物館）副館長としての約4年間の経験が生かされていたといえる．このシンガポール時代に，当時の植物園長であったイギリス人の E. J. H. コーナー博士（第1回国際生物学賞授賞者）と交友が深まり，植物園の運営・人事・研究・社会還元等の博士の考え方と実戦を広く修得されたと私たち職員にもよく話されていた．翌年の1955年に博物館

長（学芸員3名）となり1974年に退職されるまで第1線の博物館人として奉職され，今日学芸員9名が在籍できるまでの地域博物館に育てあげた功績は極めて大きいといえる．

今では博物館界の常識といえるような展示・研究・教育普及などの各事業の内容や運営方法が，一地域博物館の開館当時では考えられないほどの問題を多くかかえていることでもあり，日本全体の博物館の立場からみても新機軸と思える構想を先生は次々に実現させる努力をされた．展示の側面では，先生自身の特異な発光生物の研究成果を単なる珍奇物展示としてではなく，発光のメカニズムと多様性（深海魚やイカ類）を身近な生物（ホタルやキノコ類）を通して理解させるための展示室を設けた．恐らくこの展示は今でも世界で唯一のものと思われるが，特徴（個性）ある展示による博物館の強いイメージ作りに役立てるのがねらいであったようだ．横須賀市博物館には長い間「特別展示室」がなかったが，大量の費用をかける短い期間の「特別展示」より，個性と魅力ある「常設展示」がいつでも見られるほうがよいという発想ではなかったかと考えられる．教育普及の側面では，博物館主催の「講演会」や「自然観察会」を実施したのも先駆的事業であった．総合博物館の立場から自然科学や人文科学に造詣の深い学識経験者を講師に招き，地域市民に研究や観察の楽しさを理解させるだけでなく普及させることを目的にされた．私も聴衆者（まだ子供だった）として参加した講演会講師の中には，田中茂穂・大島正満・蒲原稔治・岡田彌一郎・川本信之博士らの魚類学者の名前を思いだすことができる．講師は先生自身が務めることも多く，教育委員会や学校にも広く呼びかけ博物館が所属する行政機関へのアピールも決して忘れなかった．特に国外調査や研究（訪ねてない国の方が少ない）から帰ったあとは得意のカラースライドを使用して施設や自然環境の解説をされた．

世界中の発光生物を求めてフィールドと諸施設を歩かれ，アラゴ海洋研究所・メッシナ海洋研究所（フランス），大英博物館・プリマス海洋研究所（イギリス），アメリカ自然史博物館・スクリップス海洋研究所（アメリカ）などでの体験をもとに，研究時間や調査期間・標本の整理と保管活用・施設利用者への便宜のあり方などもよく研究され，1970年に現在の横須賀市自然博物館を新設する際には職員配置や目的別部屋の配置を実現させる努力もされた．特に研究や調査のための利用者が，職員とは別に自由に使用できる器具機材の整った部屋をつくるための行政担当者との折衝は，先生でなければ実現不可能ではなかったかと思われる．先生がひょうひょうとした顔で折衝から帰られ，「OKだよ！」の一言がでると研究者とは別の政治的手腕を感じざるを得なかった．今ではどこの研究機関でも普通となっている文部省の科学研究費補助金であるが，国立科学博物館以外の博物館や博物館相当施設はまだ研究補助対象ではなかった時期に，第1番に申請対象博物館にしたのも先生の文部省通いの成果である．先生自身が欧米の各財団の援助によって研究交換の意義を認識し，国外にむけて研究の窓を開く重要性は科学研究費の海外学術研究への学芸員の参画という形で今も受け継がれている．

1954年の開館の翌年からは印刷物の出版に努力され，研究報告（自然・人文科学研究報告書）・館報（事業報告書）・資料集（登録収蔵品目録）など5種類の印刷物を毎年作成できる予算組を定着させた．研究報告は内外の国々の多くの機関と毎年700部近くが交換されるまでになった．先生は市域の文化財保護にも博物館が前向きになるべきであるとして，とりわけ開発の進む三浦半島の自然環境の保全を提唱された．現在自然博物館附属施設である2箇所の自然教育園は，三浦半島を代表する潜在自然植生が残された森林域（約3.8 ha: 1959年開園）と海洋生物と海浜植物の保護を目的として相模湾に面した海浜・海域（約54 ha: 1966年開園）を指定し，現在では教育普及活動と調査研究活動の両面からの活用を図っている．自然保護を重点においたこの附属自然教育園の設置にあたっては，元国立科学博物館館長の岡田　要博士と前述した英国のE. J. H. コーナー博士の助言をいただいたようで，機会あるたびに両博士の先見眼を尊敬されていた．やはり学問領域をこえた先生の人脈の強さが，博物館事業発展の基本につながっていたのではないかと思われる．このような先生の具体的な業績は，日本博物館協会評議員・常務理事（1955–1961），神奈川県博物館協会副会長（1955–1967）や会長（1971–1972）職にあってさらに広められたといえる．神奈川文化賞の授賞や国から叙勲されたときも，「みんなに助けられて好きな発光生物の研究と博物館の仕事ができたので，自分だけの努力結果ではないよ」といつも謙虚な先生でもあった．

私は小学校4年から先生が亡くなられるまでのいわば「子飼いで，不肖の弟子」ということになるが，先生から博物館学の実戦を受けたものとしてこれからも先生の信念を受け継ぎまた次の世代の人にも伝えたいと思う．私が日本魚類学会の評議員になったころから私に用がある時は「評議員さん，ちょっと！」が口癖で，私も「はい，名誉会員先生！」と返答していたのが今は本当になつかしい．

（林　公義　Masayosi Hayashi：〒238 横須賀市深田台95　横須賀市自然博物館）

魚類学雑誌
42(2): 221-222, 1995

よりよい研究発表のために

今年の魚類学会年会では114題という過去最高の研究発表が行われました．研究発表数が多いことは会員の活発な研究活動を示しています．しかし，年会の研究発表（口頭発表）を聞いていると，方法に問題があるものが見られます．内容が優れていても，発表方法に問題があると，発表者の意図するものが聴衆に伝わりません．

言うまでもないことですが，発表者は研究内容をよく理解していますが，聴衆にとっては初めて聞く内容であることをお忘れなく．分かっているようでいて，つい独りよがりな発表になってしまうことがあります．聴衆によく理解してもらえなければ研究発表の意味はありません．そのために以下の項目に注意してください．

口頭発表

1. 会場の下見をする

発表に使うマイク，指示棒（レーザーポインター），ライト，机などを下見しておく必要があります．マイクやレーザーポインターのスイッチなどを下見しておけば本番で戸惑うことはありません．思わぬ失敗を防ぐために，ぜひ下見をして，不明の点は会場係に聞いて下さい．

2. スライドは少なめに

発表時間12分，質問時間3分が1題の口頭発表に与えられている時間です．したがって，質問時間を発表に使ったとしても，15分以内に終了しなければなりません（もちろん，12分以内に終了する方がよい）．おおまかな目安としてスライド1枚に1分を割り当てると，ゆとりのある発表ができるでしょう．

多数のスライドを次々と「はい，次のスライド，はい，次のスライド」と早口で言いながら使う人がいますが，聴衆とスライド係を戸惑わせるだけです．聴衆がスライドを見て，理解する時間が必要です．

3. ゆっくり明瞭に話す

早口は禁物です．いくら割り当てられた時間内に終了しても，早口で話し，理解してもらえなければ意味はありません．

4. ひらがなで話し，漢字で話すな

耳から入ってくる発表者の言葉を聴衆は理解しようとしています．そのため，文字で示せばわかる言葉も，耳から聞くだけでは戸惑うこともあります．たとえば，胸鰭や背鰭を「きょうき」，「はいき」と言うよりも，「むなびれ」，「せびれ」と言った方がわかりやすいのです．魚類学会には異なる分野の研究者がいるのですから，多くの人にとって，わかりやすい発表をする必要があります．漢字の表現を減らし，ひらがなで話すつもりで講演するとよいでしょう．

5. 表にデータを詰め込むな

1枚の表に小さな文字を使って，多数のデータを詰め込むのは最悪です．「文字が小さくて読めないかもしれませんが」と言いながら，スライドの説明をする人がいます．聴衆をいらいらさせるだけで何の効果もありません．読めないスライドなら出す必要はありません．見やすさの目安は1枚の表に8–10行程度です．表のタイトルなどは口頭発表には不要の場合が多いことにも留意して下さい．もし，どうしても多量のデータを示したければ，表を分割するなど工夫が必要です．研究発表に使う表は，論文に使う表とは別物と考えるべきでしょう．

6. 大きくわかりやすい図を使う

表と同様，大きく，明瞭な図を使わなければ聴衆に理解されません．研究発表に使う図には，あまり文字を使わず，見るだけでわかるようにする必要があります．したがって，論文に使う図よりも工夫した図を作る必要があります．

7. マイクと適度の距離をとる

マイクの使い方一つで声の通りが違ってきます．マイクに口を近づけ過ぎたり，離し過ぎるのは禁物です．

8. 練習をしよう

時間制限のある研究発表ですから，ぜひ発表の練習をして下さるようお願いします．大学などの研究機関に所属せず，周囲に魚類学に興味をもっている人がいなくても練習はできます．スライドを自分で映し，表の大きさ，図のでき具合などを検討することはできます．また，テープレコーダーで自分の発表を録音して，聞き取りやすいかどうか，時間内に終了できるか，などを検討することができます．工夫すれば，研究発表をよりよいものにすることができます．

ポスター発表

1. ポスター発表を行う会員の数はまだ多くありませんが，口頭発表にはない利点がありますので，ポスター

発表をお勧めしたいと思います．特に，細かい表や図を使いたいときには，ポスターは威力を発揮します．ポスターは年会の期間中，展示できるので，多くの人にじっくりと見てもらうことができます．

2. ポスターは発表者がいなくても分かるように構成しなければなりません．したがって，口頭発表のスライド用原稿と同じような物を作成すると，ポスター発表には不向きとなってしまうことがあります．ポスターを見るだけで，発表者の意図が分かるように，ポスターの流れ，構成，色彩などにも工夫して下さい．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169 東京都新宿区
百人町 3-23-1　国立科学博物館動物研究部）

魚類学雑誌
42(2): 222, 1995

国立科学博物館所蔵淡水魚類標本カタログの余部について

国立科学博物館所蔵淡水魚類標本カタログ (Parts 1-4) に余部があります．入手希望の方は私宛に郵便またはファクスでご連絡下さい．電話での質問や連絡はご遠慮下さい．なお，Part によって余部にばらつきがありますので，すべての Parts をお送りできない場合もあります．また，余部に限りがありますので，希望者多数の場合には先着順とすることをお断りしておきます．

このカタログは旧資源科学研究所に保管されていた標本のデータをまとめたものです．現在までに 4 冊が発行され，今後数冊の発行が見込まれています．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169 東京都新宿区
百人町 3-23-1　国立科学博物館動物研究部
ファクス：03-3364-7104）

魚類学雑誌
42(2): 222, 1995

国際動物命名規約第 4 版検討用草案について

国際動物命名規約第 4 版検討用草案 (International Code of Zoological Nomenclature: Discussion Draft of the Proposed Fourth Edition) が関係機関に配布され，草案に対して意見を求めています．この草案は下記の住所に連絡すれば入手できます（3 ポンドまたは 5 米ドルを小切手で送付）．

The International Commission on Zoological Nomenclature
c/o The Natural History Museum
Cromwell Road
London SW7 5BD
UK

1996 年中に送付された第 4 版に対する意見は Commission で検討されることになります．第 4 版は第 3 版とは大きく異なります．詳しくは discussion draft を読んでいただきたいと思いますが，第 1 に，学名は分類群に対するラベルであり，動物学的情報を引き出すための統一的手段であるという原則を重視しています．そのため，学名の適用や形成に関する安定性を先取権や言語学上の考慮よりはるかに優先させています．

第 2 に学名に関する問題の解決を動物学者自身で直接，自動的に行えるようにしたことです．すなわち，Commission の決定を待たず，"do-it-yourself" で解決できるようになっています．

このような方針を実現するために多くの条項の改訂案が出されています．分類や学名に興味のある会員には，ぜひ読んでいただきたいと思います．そして，賛成，反対，いずれの場合でも意見を Commission に送っていただきたいと思います．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169 東京都新宿区
百人町 3-23-1　国立科学博物館動物研究部）

魚類学雑誌
42(2): 222, 1995

日本産魚類検索，全種の同定 正誤表（その 2）の配布について

日本産魚類検索，全種の同定（東海大学出版会 1993 年刊行）の正誤表（その 2）が出来ましたのでお知らせいたします．〒151 東京都渋谷区富ケ谷 2-28-4　東海大学出版会　川上文雄 (Tel. 03-5478-0971) 宛にご請求下さい．すぐに送らせていただきます．

（中坊徹次　Tetsuji Nakabo：〒606-01 京都市左京区
北白川追分町　京都大学農学部水産学科）

自然史学会連合シンポジウムのお知らせ

自然史系の学協会で組織される自然史学会連合が「自然と人間の共生—21世紀の自然史科学の研究と教育の展望を探る—」と題するシンポジウムを下記の要領で行います.

記

日時: 1995年10月7日（土）午前10時〜5時まで

場所: 早稲田大学国際会議場（新宿区西早稲田）400名先着順，入場無料

演題: 10:00　速水　格（東大名誉教授）「海底洞窟動物群の意義—生物科学と地球科学の接点—」

10:40　大場秀章（東大）演題未定

11:20　青木淳一（横国大）「動物界の知名度—ダニを例として」

12:00〜13:00　休憩

13:00　斎藤常正（東北大）「生物進化の引きがねとしての大量絶滅」

13:40　赤澤　威（東大）演題未定

14:20〜14:40　休憩

14:40　日高敏隆（滋賀県立大学長）演題未定

15:20　招待講演

16:20　閉会

問い合わせ: 山口寿之（自然史学会連合幹事）
〒263 千葉市稲毛区弥生町1-33　千葉大学理学部地球科学教室
TEL (043) 290-2832
FAX (043) 290-2859/2874
E-mail: tyamaguc@science.s.chiba-u.ac.jp

会　　記・Proceedings

魚類学雑誌
42(2): 223-227, 1995

日本学術会議だより No. 36（1995年3月）

新規に学術研究総合調査費などを計上した平成7年度予算（案）が決定された．また，アジア地域の各国科学者の代表を東京に招き，本年2月6日（月）から9日（木）までの4日間，三田共用会議所において第2回アジア学術会議〜科学者フォーラム〜を開催した．会議には，中国，インド，インドネシア，日本，大韓民国，マレーシア，フィリピン，シンガポール，タイ，ベトナムの10カ国の学術推進機関（アカデミー等）から推薦された人文・社会科学及び自然科学系の科学者20名が出席し（日本からは伊藤正男会長及び利谷信義副会長が出席），「アジアにおける学術交流のための方策」をメインテーマとして活発な討論を行った．

日本学術会議だより No. 37（1995年5月）

第121回総会が平成7年4月19日から3日間にわたって開催された．総会初日は，1)「阪神・淡路大震災調査特別委員会の設置」; 2)「国際農業工学会 (Commission Internationale de Genie Rural: CIGR) への加入」の2件が提案され，いずれも賛成多数で可決された．2日目は，伊藤正男会長から「日本学術会議の課題〜高度研究耐性を目指して〜」と題した基調報告が行われ，会長が提起したさまざまな課題について，会員間の自由討論が行われた．